

## 残念な教員

—学校教育の失敗学—

林 純次 著

著者は、京都大学大学院教育学研究科を修了後教師を目指さず、大手新聞社の記者やフリージャーナリストとして活躍した後、2003年小学校の非常勤講師として教員の道を歩み出した。

現在は、中等教育学校の40歳代の国語教師として活躍しており、教師経験は十数年と少ないが、それまでのジャーナリストとしての視点から、学校や教員を厳しい視点で見つめ、特に若い教員に課題を投げかけている良書である。

「第1章教育現場の実状」では、教育業界特有の文化や現状を読者に理解してもらう趣旨で書いたとしているが、「鈍感教員」「学ばない教員」「学べない教員」「コミュニケーション不全教員」「理念欠如型教員」「マイナス査定为学校文化と、それに怯える教員」について述べているが、教員のマイナスイメージが強く同意できない内容もあるが、心当たりの指摘もあり、読者に応じた理解でよいと考える。

なお、1章の途中で本書を投げ出したくなる面もあるが、第2章「教師の技術」以後は、参考となり同意できる内容も多くなり、第2章から読み始め、最後に第1章を読む方がよい。

「第2章教師の技術」では、「教師として持つべきプロフェッショナル意識」「自己認識」「説明・解説」「指示」「指名」「発問」「板書・プリント」「机間指導」「教育効果を高める教師の動き」について、著者の体験と実践に基づいて具体的な事例を示して述べられている。

著者の学校教育への熱い思いは、初めて非常勤講師として一步を踏み出したときの指導教官であるT先生との出会いに対する記述から理解できるのでその一部分を紹介する。

「T先生は4年生の学年主任をしながら、新人教員の担当で、ご自身のクラスでは不登校の児童も受け持っていた。また、ご家庭では3人のお子さんを育てる母親でもあった。それでいて口調は常に優しく、丁寧に教えて下さる方で、若手が落ち込んでいるのを見ると、直ぐに駆けつけていって慰める視野の広さがあった。常に明るく前向きに授業や児童対応をしていらっしやっただけでなく、授業の腕前もピカイチであった。両手で板書ができることにも驚かされたが、不登校の児童、成績不振者、成績上位者すべての児童を満足させていることに目から鱗が落ちた。……ある日先生が何気なく『寝る時間はありませんね。3時間も寝られればいいほう』とおっしゃった言葉を私は忘れない。誰よりも質の高い実践をされていた先生が、児童のためにギリギリの闘いをしていたとわかった瞬間だった。……T先生の教育行為にかけける情熱の大きさに比べて、妥協を重ねてきた自分の愚かさが露わになった瞬間でもあった。」と。この一文からも著者の教育に対する心情が窺える。

「第3章教育現場における評価」ではその手法の難しさが述べられ、道徳の教科化によりその評価法には、まじめな教師ほど悩んでおり、教師も生徒と一緒に考えるべき科目であり評価がなじまないと述べている。「第4章教員の成長」では、素直さとコミュニケーション能力の大切さが述べられ、「第5章授業について」では5つの授業形態を紹介している。「第6章教員が技術を身に付ける順序」では、相対的剥奪指標方式が提案され、教員に必要な技術とその効果的な習得手法を紹介している。「第7章身に付けてほしい3つの力」では、「①精神的タフネスさ②積極的行動力とそれに関連する思考力③自己認識と他者認識」を取り上げて解説している。

(光文社新書, 261頁, 800円+税) (山下省蔵)